

2021年横浜ナザレン教会・受難節第一主日(2/21)礼拝説教

「メシアとは何者か？」

ルカ福音書第20章41節から第20章44節

【聖書】

ルカによる福音書20:40 彼らは、もはや何もあえて尋ねようとはしなかった。
41 イエスは彼らに言われた。「どうして人々は、『メシアはダビデの子だ』
と言うのか。42 ダビデ自身が詩編の中で言っている。『主は、わたしの主に
お告げになった。「わたしの右の座に着きなさい。43 わたしがあなたの敵を
／あなたの足台とするときまで」と。』44 このようにダビデがメシアを主と
呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」

1 最後の数日間の論争

先週の2/17(水)から、2021年の受難節が始まりました。私達は、
イエス・キリストの十字架のみ苦しみを思い起す季節を迎えています。そし
て、受難節第一主日の今朝、礼拝で聴く聖書のテキストもまた、十字架の時
が近づきつつあるエルサレム神殿が舞台です。主は、十字架の直前の数日間
を、エルサレム神殿での論争に費やされました。イエス様にとっては十字架
の前の数日は、一分一秒でも惜しい筈。敵である律法学者達や祭司長達から
議論をしかけられても、敢えて無視し、弟子達や民衆を教え導くことに専念
されてもよかったです。しかし、主イエスは、彼らからの挑戦を敢えて受
けてこられました。その様子をふり帰ってみます。最初は神殿で民衆に教え
導く主イエスに対して祭司長達が、「何の権威でこのような事をしているの
か」と問うものでした。主イエスは「洗礼者ヨハネの権威は神からのもの
か、人からのものか」と問い返します。そうする事で、彼らがより頼んで
いるのは神の権威ではなく、人間の権威である事を明らかにされました。更
に、主は続けて、葡萄園と卑怯な農夫達の譬え話を話され、彼らが神のもの
を自分達のものとしようとして、神を殺そうさえするのだと言われます。自
分達が気づいていない本当の姿を言い当てられて、狼狽えた律法学者や祭司
長達、スパイを送り込み、ローマ皇帝に税金を納めるべきかどうかを尋ねさ
せ、主イエスを陥れようとします。主はこの難しい局面も、「皇帝のものは
皇帝に、神のものは神に返しなさい」と鮮やかに切り抜けました。そうし
て、「私達は他ならぬ神のものである」と、教えてくださいます。そうこう
しているとサドカイ派の人々が復活の命について、論議を吹っかけて来ます。
主は、この世の論理から神の国を考える彼らの考え方の間違いを指摘し、甦
りの命とは神に対して生きる命である事をお示しになりました。

こうして見ていきますと、これらの論争で、主イエスは、人間の本質を見

抜き、隠れたものを顕わにして、そこに働かれる神の真理を大胆に語っておられます。

2 ダビデの子

そんな論争も今日の聖書テキストで最後です。復活の命を語る主の言葉に圧倒されたのか、敢えて質問する者はいなくなりました。黙り込んだ彼らに向かって、今度は主イエスの方から問いかけたのが、今日の場面です。テキストは5節と非常に短いのですが、同じ問いが二回も繰り返されています。「どうして『メシアはダビデの子』というのか」というものです。メシアとは、「油注がれた者」という意味のヘブライ語で神から選ばれた救い主という意味があり、ギリシャ語ではキリストです。主イエスの時代、人々は、神からの救い主を「ダビデの子」と呼ぶようになっていました。今日の少し前、18章の最後でエリコの近くで主イエス一行と出会った盲人の物乞いも、「ダビデの子よ、私を憐れんで下さい」とイエス様に向かって叫びを挙げました。

救い主を「ダビデの子」と呼ぶのは、神の民イスラエルの歴史と深く関係しています。イスラエルという国が強大であったのは、主イエスの時代から1000年近く前のダビデ王、ソロモン王の時代だけ、他の時代の大半は、吹けば飛ぶような弱小の民であり、大国に支配され続けてきました。主の生まれる百数十年前、マカバイ戦争と呼ばれる戦いを経てようやく数百年ぶりに独立したのですが、それもつかの間、内紛などによってローマ帝国の傀儡政権が成立してしまい、主イエスの時代に至っています。神を知らない外国に支配される時代が何百年も続く中で、ユダヤの人々は、遠く先祖から伝え聞く栄光のダビデ王国に憧れを抱き、ダビデを理想の王としていきました。イザヤをはじめ預言者達も、「神の民を救う方は、ダビデの血筋から現れ、イスラエルを諸外国の軛から解き放ち、平和に導く」と預言します。世の終わりに現れる救い主は、やがて「ダビデの子」と呼ばれるようになります。これは蛇足なのですが、そのようにダビデ王を理想化する流れがあっても、旧約聖書はダビデの罪過ちをも赤裸々に語ります。理想化はしても、偶像化はしていない、聖書の民の奥の深さだと思えます。

3 イエスはまことの人

さて、ダビデ王がイスラエルの人々、ユダヤの人々の間で特別な王であったことは、旧約聖書の詩篇を読んでもわかります。詩編は、信仰の詩150篇が収められている旧約聖書の書物、私達に最も馴染み深い旧約聖書の書物ですが、そのうちのかなりの数に、「ダビデの詩」という前書きがあります。

ですが、現代の旧約聖書の聖書学者で、ダビデ王が、これらの詩篇を実際に詠んだ、と考える人はいません。主イエスが引用しており、先ほど一緒に読み交わした詩編110も、「ダビデの詩」という前書きがありますが、現代の聖書学では、作者はダビデ王とは考えられていません。詩篇110篇は、神殿の職業的預言者が、自分の仕える方が王に即位する事を祝福して歌った詩だとされています。伝説によるとダビデは琴の名手。楽器の名演奏家は、作詞・作曲もよくする事が多いことから、人々は、ダビデ王を模範的信仰者として理想化し、多くの詩をダビデ王作とする伝承が生まれたようです。

しかし、ここで大きな問題が出てきます。主イエスは、今日のルカ福音書のテキストでは、この詩編110篇をダビデが詠んだという事を前提に、お話をされています。110篇がダビデの詩でなければ、筋が通らなくなります。主イエス、神の独り子である筈のお方が、現代の聖書学者が判る事を知らなかったとは、道理が通じません。いったい、どう考えればいいのでしょうか。

確かに、主イエスは、神の独り子であり、子なる神である、と教会は信じます。しかし、それだけではありません。教会は、同時に「まことの神が、まことの人となってくださった」と告白するのです。主イエスは、現代日本人でも、現代イスラエル人でもなく、2000年前のパレスティナに生きる男性として人となりました。そして、当時のパレスティナ地方で生きていた人々に、真理の言を語りかけられ、力強い業をなされた。仮に、主イエスが、現代聖書学のような知識を、2000年前のパレスティナの人々、エルサレムの人々に語ったとしたら、人々は理解できたでしょうか。受け入れられたでしょうか。主イエスは、当時の人々が神の真理が理解できるように、と当時の人々に寄り添って語られるのです。

その主イエスの説き明かしによれば、詩篇110篇1節の最初の「主」は定冠詞付きの「主」であり、「神」を指します。そして「わが主」とは、この詩の作者、ダビデ王の主人、メシアと呼ばれる救い主の事です。主イエスは、2000年前のイスラエルに生きる人々に、この詩編110を示しつつ、「あのダビデ王すら待ち焦がれたまことの王が来るのだよ、希望があるのだ、その救い主がもたらす救いがあれば、神の民は救われる」と語られました。自分達の現実を嘆きつつも、ダビデ王を超えるメシアへの希望に生きる事ができる、と指し示されたのです。あたかも一人一人の傍らに坐り、巻物に書かれた詩篇110篇の言葉を指さしながら、ほら、ここにこう書いてあるよと主はお語りになっておられるようです。

確かに、2000年後の世界に生きる私達から見れば、そこには愚かな幻想もあるでしょう。自分勝手な救いの待望ともいえるでしょう。しかし、彼

らのそのような幻想の背後にある嘆き、呻きを、主イエスは、決して軽く考えてはられません。それどころか、ご自身の嘆き、呻きとして、共に担ってくださいます。そして、「ダビデ王が慕ったキリストこそわたしである」と、繰り返し語ろうとされる。このようにして、まことの神の子は、まことの人として人々を導いてくださいます。

4 イエスは全ての人の救い主

しかし、主イエスがそのようにして救ってくださるのは、2000年前のイスラエルの人々だけではありません。確かに聖書によれば、神は、預言者を通じて、救い主は、ダビデの子孫から出ると告げられました。新約聖書でも、ルカとマタイの福音書は、主イエスはダビデ家の子孫のヨセフの家に人となった事を伝えていますし、使徒パウロも「肉によればダビデの子孫から生まれ」と語っています。ですが、主イエスは、イスラエルの人々だけを救う救い主ではありません。神は、神の民の祖、アブラハムにこう仰るからです。「わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。」(創世記 12:2~3) 天の御神は、アブラハムの子孫である神の民、イスラエルを通じて、全ての民族を祝福され、ご自身の民としての命をお与えになる、と約束されました。ですから、まことの救い主は、アブラハムの血筋に連なる神の民の一員としてお生まれになりますが、民族や国家という枠を超えて、全ての人を神のみ救いに与らせようとされるのです。

ですが、私達人間は自分達の事を中心に物事を考えてしまいます。途方もない神のご計画を知るよしもありません。ましてや、救い主がどのようにしてそれを実現されるか想像できる者はいませんでした。今日の聖書の場面でも、主の周りには祭司長、律法学者達だけでなく、民衆などたくさんの人々がいたと思われ、最も主の身近にいて、その言葉や行いを見聞きしていた弟子達もいたでしょう。ですが、誰一人として、「メシアがダビデの子なのか」つまり「メシア、キリストとは何者か」という主の問いかけに答える事ができる者はいませんでした。

しかし、その弟子達にも判る時がやって来きます。エルサレム神殿での論争の後、主イエスは捕らえられ、十字架につけられ、殺されます。そして三日後に甦られます。主は、弟子達と四十日共に過ごした後、天に上られます。弟子達は、主の命令と約束に従い、エルサレムに集まり、神の霊が注がれる事を待ちます。祈って十日目のこと、遂に約束の聖霊が、祈る弟子達の群衆に降って来られます。すると、弟子達の心が開かれ、目が開かれるのです。その時、何が起こったかという、やっとならぬところで弟子達は、理解したので、

今日のルカ福音書第20章の主イエスの問いに対する答えが分ったのです。「メシアとは何者か」という問いかけに対する答えが、「ああ、そうか、そういう事か、今、やっと分かった」となった。

だから、弟子達の代表であるペトロは立ちあがり、エルサレムの人々に説教しました。ルカ福音書第20章の時点では、きよとんとして、ダビデの子をめぐる問答を脇で聞いていただけであったかもしれないペトロが、堂々と説教する者と変えられました。ペトロは、「主よ、今こそ私達は答えます」という心であったかもしれません。彼もまた、主イエスと同じく、今日の聖書テキストで引用されている詩篇110篇の言葉を使用します。ペトロはこう語りました。「ダビデは天に昇りませんでした、彼自身こう言っています。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着け。わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで。』』だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」(使徒言行録2:34~36)。聖霊が注がれ、弟子達は初めて、「メシアとは何者か」という主イエスの問いかけの答えが分ったのです。「あなたがたが、つまり、神の民が、十字架につけて殺したイエスこそ、神が主とし、またメシアとなさった方。」と分かったのです。それは、自分達が出した答えではありません。神が聖霊を注いで出してくださった答えです。どんなに優れた学者でも出てこないような答えが与えられたのです。他の誰でもない、「神の民によって十字架につけられて殺されたこのイエス」が神によって、今キリストとして立てられている、ペトロのこの説教が、教会の最初の説教であり、新しい歴史の始まりでした。教会の時代という新しい歴史の始まりです。

神は、このように、聖霊を注がれた人々を通じて、十字架につけられた救い主イエス・キリストにより全ての人々を救おうとされています。

5 私達の信仰の中心

それはどういう事なのでしょう。主イエスが、そしてペトロが引用した詩篇、第110篇の1節を見ていきたいと思います。「主なる神は、私の主、救い主にお告げになった。『わたしの右の座につきなさい。わたしがあなたの敵を、あなたの足台とするまで』と」。足台というのは、戦いに勝利した国の王が、負けた敵国の王の首を足で踏みつけていた事から来ており、「足台にする」とは、敵に完全に勝利する事を意味しています。

この詩編は、主イエスが引用された、という事もあって、初代教会でとて

も親しまれたようです。詩篇 110 篇にある「神の右の座につく」という言い回しが、先ほど、共に信仰告白した使徒信条にも歌い込まれています。「三日目に死人のうちより甦り、天に上り、全能の父なる神の右に坐し給えり」という部分です。神の右とは、神にとっては最も重要な者が座る場所、神に等しい者が座る場所という意味合いがあります。

神の右の座と言えば、使徒パウロは、コロサイ信徒の手紙の中でこのように語っています。「あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。」(コロサイ信徒 3 : 1) イエスをキリストと信じ洗礼を受けた者は、罪に対して死に、聖霊が与えられて、新しい命に生きる、つまり、洗礼によって、聖霊という霊なる御神を通じ、救い主イエス・キリストが一人一人の内に働いてくださる、そして、新しい命、主イエスの甦りの命に生きる事ができる、と教会では、信じられています。

しかし、そうして洗礼を受けてクリスチャンとされても、この地上に、罪の世に、生きている事には変わりはありません。この世の力は強く、私達の力では負けそうになります。くじけそうになります。だから、パウロは言うのです。「あのキリストが、救い主が神の右の座に着いているのだから、上にあるものを求めなさい」。神の右の座、神に最も近い場所におられるキリスト・イエス、このお方こそ、十字架に架けられ、死んで葬られ、三日目に甦られた方。手と足には十字架に打ち抜かれた釘のあと、腹には刺し貫かれた槍の跡そのままのお体で、全能の神の最もお側近くにおられるのです。私達人間の罪を赦す為のみ苦しみのあとそのまま。自身を殺す者達をも赦し愛する愛の証を負った姿で。この救い主が私達のことを父なる御神に執成してくださらない筈はありません。だから、私達は安心してこの地上にあるものではなく、上にあるものを目指して、ひたすらに進むことができます。自分の罪、他の人の罪に深く傷ついた時も、神さまの御心よりもこの世の栄に、富や名誉や地位に目や心を奪われそうになる時も、欲望に手綱を取られてしまっている時も、自分自身を持って余し呻きを挙げる時も、辛い病を一人で耐え心休まることがない時も、不条理な苦しみを受け、神などいないのではないかと思うときも、ただ、この救い主のおられる上にあるものを祈り求めなさい。自分の信仰に自己満足する事なく、上にあるものを求め続けなさい、そうする事によって、クリスチャンは、この地上にあって神の子として生きて、救い主を証し、この世界に神の救いを宣べ伝えていく新しい神の民とされる、と使徒パウロは語っているようです。

そんな新しい神の民である私達の歩みは、ペトロの次の告白によって始まります。「十字架につけて殺されたイエスを、神は主とし、また救い主とな

さった」これこそ、私達の信仰の中心です。これ以外に、私達の信仰の中心はありません。

私達は、今、礼拝する場所から、この世へと出ていこうとしています。十字架につけられた救い主によって神の子の命を生きる私達は、この世の何者をも自分の主人とする事もなく、ただキリスト・イエスのみを自分の主人として従い、この方の証人として生きていきたい、罪赦されて救われて生きる喜びを証し、神を愛し、自分を愛し、隣人を愛して、救い主イエス・キリストを宣べ伝えて生きたいと心から願います。